【論文】

スーパーグローバルハイスクール指定校生徒の興味関心および意識の変容に関する質的研究

京都大学　　服部　憲児

序

近年の我が国においては、国家の財政難を背景に NPM の考え方が採用され、教育政策においても成果主義が取り入れられ、事前・事後評価、それに基づく重点配分もなされるようになっている [1]。そこでは数値目標とその達成状況が重視され、政策立案の段階から成果目標を立て、一定の指標によって評価する方向に進んでいる [2]。しかし、教育関係事業の成果は数値化できるものだけにとどまらない。数値では表すことが困難な成果も適切に考慮しなければ、教育政策の正当な評価は困難であり、歪んだ評価になる危険性が大きいと言わざるを得ない。

このような問題意識から、服部（2021）は、スーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）指定校の教員に対するインタビュー調査の分析により、教員がどのように SGH 事業に対応したか、教育に対する意識の変化や資質・能力の向上の認識などを明らかにした。そして、先行研究においては定量的な手法により SGH 事業の成果が分析されているものの、そのプロセスや因果関係などは必ずしも明らかになっていないことを指摘している [3]。さらに、SGH の募集要項で求められている目標を見ると、20 項目のうち、明らかに定量目標であるもの（生徒数、生徒の割合、入賞者数、参加者数など）が 17 項目となっている――しかもそれらは短期的な成果の指標である。残りの３つのうち２つは量的目標にもなり得るもので、量的指標を中心に評価を行うという意図は明白である。可視化が容易な外面的な指標のみで成果を測定しようとしており、教育の本質的な部分ともいえる生徒の変化、特に内面的の変化などは考慮されていない。したがって、教育の成果を部分的にしか捉えられない形になっている。

以上から、本研究では、上記論文で指摘された先行研究の状況や上述の政策評価上の問題点に鑑み、SGH 事業に焦点を当て、数値では捉えることが難しい教育成果を、質的分析方法を用いて明らかにすることを目的とする。それは、SGH プログラムの対象である高校生を対象とし、その認識に着目し、プロセスも考慮しながら、教育の成果を多角的・複眼的に示すことを試みるものである。SGH 事業自体は 2020 年度をもって終了となり、「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」および「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」へと受け継がれていくことになる [4]。しかしながら、高校生の語りの分析から事業の成果の把握を試みることは、政策の成果の多角的・複眼的検討に有意に作用し、今後の教育改革に対しても重要な示唆が得られると考える。

１．研究の方法と対象

(1) 分析方法

上記の研究課題を明らかにするために、本稿での分析テーマを「SGH の教育プログラムの生徒の受け止めとその結果」とする。具体的には、(1)SGH の新しい教育プログラムをどのように受け止めたの

か、⑵それをどのように感じ、何を学んだのか、⑶SGH の教育プログラムを経験した結果、どのような影響を受けたと認識しているのかを明らかにする。

分析の手法としては、木下康仁の M-GTA による質的分析を援用する [5]。M-GTA の説明やその教育領域での有効性については、既に先行研究で言及されているので [6]、重複を避けるためここでは省略し、本研究が M-GTA を研究方法として参照することが適切である理由を以下に提示する。第１に、研究対象である SGH 事業の教育プログラムは、当然ながら生徒同士、教員同士、生徒と教員等、人と人との関わりの中で実施されるものであり、それらの相互作用の中での生徒の変化を捉えようとするものである。したがって社会的相互作用にかかわる研究であると位置づけることができる。第２に、本研究では、SGH 指定により様々な教育プログラムが実施されることになり、それらを通して生徒が様々な経験をし、そこから学び、思考し、成長していくプロセスに着目するものであり、プロセス的性格を有しているといえる。第３に、これらの分析を通して、新しい教育プログラムに接しての生徒の思考や行動の変容プロセスを明らかにし、その理論化を試みるとともに、それが教育実践や学校経営へとフィードバックされ、教育現場で活用されることを目的としている。よって、本研究は教育および教育経営改善の理論生成と実践支援を同時に目指すものである。

⑵ 分析に用いるデータ

本稿の分析に用いるデータは、SGH 指定校に在籍する生徒に対して行った半構造化インタビューの録音データである。インタビュー調査自体は、生徒に加えて、卒業生、教員に対しても行った（いずれも調査当時）。対象校は SGH 指定校２校（公立１校、私立１校）である。以下「A 校」「B 校」と表記するが、学校が特定されることを避けるため、どちらが公立校か私立校かはここでは言及しない。調査の実施概要は下記の通りである。

A校　調査日：2018 年 12 月 8・11・14 日、2019 年 1 月 11・25・29 日、2 月 13 日、3 月 6 日
場所：A 校　　調査対象者：同校教員 26 名、生徒（当時）22 名、卒業生 12 名
B校　調査日：2019 年 2 月 7・8・20・21 日
場所：B 校　　調査対象者：同校教員 14 名および生徒 17 名

生徒に対する主な質問項目は、両校共通で以下の通りである。

・SGH の何が面白い（場合によっては面白くない）か。SGH の教育プログラムから何か学んだことはあるか。受けた影響はあるか。それはどのようなものか。
・高校に入ってから身についたと思うことはあるか。
・どのような勉強の仕方をしているか。何か工夫をしているか。SGH 関係の学習と受験勉強との両立はどのようにしているか。
・関心のあることは何か。学校の勉強・受験勉強以外に何かしているか。それはいつ頃からか。
・将来はどのようになりたいか（進学、職業など）。

分析作業としては、インタビュー調査において聞き取った録音データの文字おこしを行い、データ内にある記述を参照し、オープン・コーディングにより概念（発話内容の趣旨・要点）を生成し、概念ごとにワークシートに記入した。ワークシートはA校については 30 枚、B校については 29 枚作成されたが、概念の不成立、統合、修正の結果、最終的に成立した概念数はそれぞれ 23 と 20 となった。

次いで概念の対極例・矛盾例の有無をチェックし、恣意的・操作的解釈の回避を行った。全ての概念について対極例、矛盾例が無いこと、新たな概念の生成の可能性が無くなったことを確認した。そして概念間の関係性を検討し、関連性の強い概念を包括的に表現するサブカテゴリー，さらに関係するサブカテゴリーおよび概念を包括的に表現するカテゴリーを作成した。A校についてはサブカテゴリー数３，カテゴリー数５、B校についてはサブカテゴリー数５、カテゴリー数４となった。最後に概念、サブカテゴリー、カテゴリーの関係性を示す概念図を作成し、ストーリーラインをまとめた [7]。以下、各校についての分析結果を示す。

２．生徒調査の分析結果

(1) A校の生徒調査の分析

1）抽出された概念とその定義

A校生徒の発話からは以下の 23 の概念が抽出された。概念名とその定義は以下の表１の通りである。欠番があるのは分析の過程で成立しなかったものがあるためである。

表1. A校生徒の発話から抽出された概念

	概念名	概念の定義
概念1	外国に行く機会	外国に行ける機会があることを評価する。
概念2	様々な機会がある	様々な機会があることが良い。
概念4	行ってみて分かること	実際に現地に行って初めて分かること／行かないと分からないことがある。
概念5	将来への準備	将来やりたいことの関係で活動を捉える。
概念6	考える／動く機会・きっかけ	考えたり、行動したりする機会やきっかけがあった。
概念7	関心を持つ	活動することによって関心を持つようになる。
概念8	将来への影響	進学先の選定や将来の方向性や在り方に影響があった。
概念9	視野の拡大	活動や高校生活を通して視野が広がった。
概念10	他者からの刺激	他者と接することで刺激を受けた。
概念11	リピート希望	もう一度参加してみたい。
概念12	問題解決へとつなげる	見聞したり、調べたことを元に問題解決を考える。
概念13	自分で調べる	興味のあることを自分で調べる。
概念14	思考力の深まり	考えが深まった。
概念15	大学で有効	大学生になった時にプラスになる。
概念16	知識・技能の獲得	知識や技能をえることができた。
概念18	難しさへの気づき	難しいということに気がついた。
概念19	交流の継続	現地で会った人と交流を続けている。
概念20	意見交換の機会	意見交換の機会があり、そこから学ぶことができる。
概念21	リーダーシップの獲得	活動を通してリーダーシップが身についた。
概念23	アドバイスにより成長	アドバイスをもらったことにより、様々なことが身についた。
概念24	成功体験	良い経験をしたと感じた。
概念25	異文化理解	異質な物・異文化を受け止める力が付いた。
概念26	日常生活への影響	活動が日常生活に影響を与えた。

各概念は複数のインタビュー対象者の発話から生成されているが、紙面の関係上すべての概念について具体例を紹介することができない。そのため、以下に概念１<外国に行ける機会>を例として、その

内容と概念の生成のもととなった具体例の一部を示しておく[8]。

＜外国に行ける機会＞とは、「外国に行ける機会があることを評価する」ものである。具体例は以下の通りである。末尾の（　）内は整理用の生徒番号である。

・やっぱりいろんな国いけたり、絶対途上国とか自分でいけないんで、そういう機会があって、チャレンジしたいなって思ったらすぐできるんで、それはすごい良いなって思います。（AS1b）
・特にフィールドワークは実際あまり行けないようなところとか、行かせてもらって、特に修学旅行とかやったら、現地の村の人とコミュニケーション取るって言うのは、滅多に出来ない機会なんで、出来る機会が少ないって言うものを取り扱っていただいてたのが、すごい自分にとって良かったです。（AS3）

2) カテゴリーおよびサブカテゴリー

A校の生徒調査の分析の結果生成された概念、サブカテゴリー、カテゴリーおよびそれらの関係性を図示した概念図は下掲の通りである。概念および関係性は、複数の調査対象者に共通したもののみを抽出した。図中で概念名は＜　＞、サブカテゴリー名は［　］、カテゴリー名は【　】で表現されている（以下の記述においても同様に表記する）。図中の矢印はカテゴリーやサブカテゴリー間の関係性を表している（詳細は後述）。

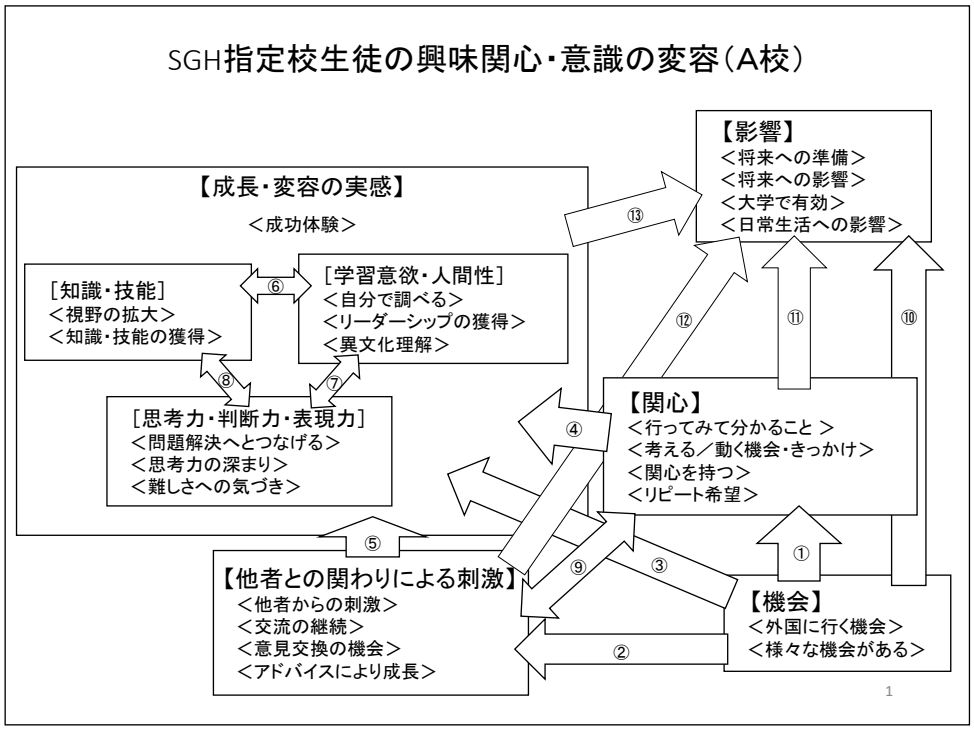

図１．Ａ校生徒調査分析の概念図

生成された５カテゴリーは、【機会】、【他者との関わりによる刺激】、【関心】、【成長・変容の実感】、【影響】である。本来であれば、各カテゴリーの内容について記述の具体例（ヴァリエーション）を用

いながら説明するところであるが、紙面の関係から省略せざるを得ない。そのため、表１にある概念の定義を参照しながら、以下の説明をお読みいただきたい。

①【機会】

生徒たちは、多様な学びの【機会】 、すなわち＜外国に行く機会＞や＜様々な機会がある＞ことを好意的に捉えている。

②【他者との関わりによる刺激】

生徒たちは、多様な学びの【機会】の中で、＜意見交換の機会＞を持ったり、＜他者からの刺激＞を受けたり、他者からの＜アドバイスにより成長＞したりしている。その後＜交流の継続＞をしている者もいる。このように教員、生徒同士、外部人材などの【他者との関わりによる刺激】を実感している。

③【関心】

生徒たちには、学びの【機会】の中で、＜行ってみて分かること＞が多い。それが＜考える／動く機会・きっかけ＞になったり、＜関心を持つ＞ことにつながったりしている。活動の＜リピート希望＞を持つ者もいる。かくして生徒たちは、様々な事柄に【関心】を強く持つに至っている。

④【成長・変容の実感】

生徒たちは、多様な学びの【機会】の中で様々な経験をすることにより、自らの【成長・変容の実感】をしている。その内容は、［知識・技能］の習得、［学習意欲・人間性］の向上、［思考力・判断力・表現力］の獲得にわたり、学力の諸要素のバランスが取れたものとなっている。また＜成功体験＞も持つことができている。

このカテゴリーには、3 つのサブカテゴリーが含まれている。［知識・技能］は＜視野の拡大＞や＜知識・技能の獲得＞を、［学習意欲・人間性］は＜自分で調べる＞力の獲得、＜リーダーシップの獲得＞、＜異文化理解＞の深化を、［思考力・判断力・表現力］は＜問題解決へとつなげる＞力の獲得、＜思考力の深まり＞、＜難しさへの気づき＞を内容とするものである。

⑤【影響】

生徒たちは、多様な学びの【機会】の中で様々な経験をし、【関心】を持ったり、成長したりしている。これらの諸経験が生徒たちに様々な【影響】をもたらしている。それは＜大学で有効＞なことの獲得であったり、＜将来への準備＞につながったりしている。また、＜将来への影響＞だけでなく、＜日常生活への影響＞もある。

3) 各カテゴリー等の間の関係性

次に、概念図にある矢印の意味を説明することにより、各カテゴリー等の関係性を示したい。矢印は各カテゴリー等を結びつけた発話が複数存在することを示している [9]。本来であれば、各矢印の説明について該当する記述の具体例（ヴァリエーション）を用いながら説明するところであるが、やはり紙面の関係から全てを紹介することができない。そのため、矢印①についてのみ具体例を示しながら説明し、

矢印②以下は説明のみを記することとする。

矢印①：SGH の教育プログラムとして国内外で活動する様々な学びの【機会】がある。それらに参加することで、生徒は今まで気づいていなかったこと、考えていなかったことに【関心】を持つようになる。具体例としては、発展途上国へのスタディーツアーに参加した生徒 AS6 は、「一番衝撃的だったのが、野良猫、野良犬とかじゃなくて、野良馬、野良牛みたいな。（…中略…）それを見た時に、すごいなこの国は、まだ世界にはこんなところがあるんだって一番関心をもちました」と語るとともに、全体としては「SGH のプログラムを受けたことによって、世界について考えることができたし、有り難かったかなと思います」と述べている。また、生徒 AS15 は「実際に自分で足を運んでみないと、その、聞いてるだけの情報じゃ何も分からなくて、で、実際に足は込んでみたらこうだったって言う事が多くて、現地の方が思ってらっしゃる問題点と私たちが日本から見て危ないとか思ってる問題点がそれぞれ違うくって、やっぱり行ってみないと分からないって言うのは一番思いました」と現地での学習機会に接しての気づきが強く印象に残っていることを語っている。

矢印②：SGH の教育プログラムにおける様々な学びの【機会】の中には人と関わるものが多い。そこから生徒は【他者との関わりによる刺激】を受けている。

矢印③④⑤：生徒は、SGH の教育として提供される様々な【機会】を通して（矢印③）、また【機会】を通して【関心】を持ったことにより（矢印④）、さらには【機会】を通して【他者との関わりによる刺激】を受けて（矢印⑤）、［知識・技能］、［学習意欲・人間性］、［思考力・判断力・表現力］が身についたと認識し、【成長・変容の実感】をしている。

矢印⑥⑦⑧：［知識・技能］、［学習意欲・人間性］、［思考力・判断力・表現力］は相互に結びついており、相乗効果がある。例えば、生徒は、ある事柄について意欲的に調べることで新しい知識を獲得したり、逆に知識が蓄積されることで興味が湧いて意欲をもって調べてみたりしている。

矢印⑨：【関心】と【他者との関わりによる刺激】との間には双方向的関係がある。生徒は他者と関わることで関心をもったり、関心を持ったことで他者と関わったりする。

矢印⑩～⑬：SGH の教育プログラムを通して、様々な【機会】を経験したこと（矢印⑩）、様々な事柄に【関心】を持ったこと（矢印⑪）、また【他者との関わりによる刺激】や【成長・変容の実感】（矢印⑫⑬）が、将来あるいは現在に【影響】していると生徒は認識している。

4) ストーリーライン

以上の分析結果をストーリーラインとして要約すると、以下のようになる。SGH に指定され、海外での学習や探究型学習など、A校には様々な機会が存在している。生徒たちは、そのような機会に触れることで、興味関心を持ったり、深く考えたりするようになる。生徒たちは成長や変容を実感しており、

知識・技能、思考力・判断力・表現力、学習意欲・人間性も身についたと認識している。また、他者との関わりからも、生徒たちはそのような成長を感じている。さらに、機会を活かして学ぶことにより、進路や学習方法など、生徒たちの将来や日常生活に変化が生じている。

⑵ B校の生徒調査の分析

1) 抽出された概念とその定義

B 校生徒の発話からは以下の 20 の概念が抽出された。概念名とその定義は以下の表２の通りである。各概念はＡ校の分析と同様の方法で抽出している。

表2. B校生徒の発話から抽出された概念

	概念名	概念の定義
概念1	高校進学で考慮	進学先を決める時にSGH指定校であることを考慮した。
概念3	知らなかったことを学ぶ	知らなかったことを知ることができた。
概念6	協力の重要性	協力することの難しさ・大切さを学んだ。
概念8	発表の技術の習得	技術面・精神面において発表の仕方が上手になった。
概念10	積極性の獲得	積極性が身についた。
概念11	留学・外国への関心	経験を活かして留学をしたい、外国に行きたい。
概念12	進路への影響	SGHの活動が進路に影響を与えた。
概念13	外国に行っての気づき	外国に行ってみて分かったことがある。
概念14	興味・関心を持つきっかけ	活動により興味・関心を持つようになった。
概念16	視野の広がり	物の見方が変わったり、視野が広がったりした。
概念17	人とのかかわりから刺激	かかわりを持った人々から刺激を受けた。
概念18	英語に対する意識の変化	英語に対する見方や意識が変わった。
概念20	コミュニケーション能力の獲得	話し合いにより他者とコミュニケーションを取れるようになった。
概念21	自分の意見	自分の意見を言えることの重要性を知った。
概念22	学びの充実感	頑張って取り組んで充実感があった。
概念23	思考の深まり	深く考えたりするようになった。
概念24	話し合いによる解決	話し合いをすることで解決を図った。
概念25	未来との繋がり	SGHの活動が進学や将来などと繋がった。
概念28	地元の再発見	気づいていなかった地元のことに気づいた。
概念29	人とかかわる経験	様々な人との関わりが、良い経験になった。

2) カテゴリーおよびサブカテゴリー

Ｂ校の生徒調査の分析の結果生成された概念、サブカテゴリー、カテゴリーおよびそれらの関係性を図示した概念図は下掲の通りである。概念および関係性の抽出法、図中の表記法はA校の場合と同様である。生成された４カテゴリーは、【学習環境】、【気づき】、【能力の獲得】、【将来との繋がり】である。以下、各カテゴリーの内容について、A校と同様の方法で説明する。

①【学習環境】

生徒たちはSGH の【学習環境】を好意的に捉えている。そこでは［現地に行って分かる］ こと（＜外国に行っての気づき＞、＜地元の再発見＞）が多く、また［人とのかかわり］（＜人とのかかわりから刺激＞を受けること、＜話し合いによる解決＞、＜人と関わる経験＞）の中で多くのことを学んでいる。これらは＜興味・関心を持つきっかけ＞になったり、＜学びの充実感＞につながったりするとともに、＜高校進学で考慮＞される場合もある。

②【気づき】

上記のような環境下で学ぶことにより、生徒には様々な【気づき】（＜協力の重要性＞、＜英語に対

する意識の変化＞、＜自分の意見＞を持つことの重要性）がもたらされている。

③【能力の獲得】

生徒たちは SGH の活動を通して多様な【能力の獲得】に至っている。それは［知識・技能］の獲得（＜知らなかったことを学ぶ＞、＜発表技術の習得＞、＜コミュニケーション能力の獲得＞）に加えて、［思考力等］の深まり（＜視野の広がり＞、＜思考の深まり＞）や、［意欲・関心］の高まり（＜積極性の獲得＞、＜留学・外国への関心＞）も実感している。

④【将来との繋がり】

SGH の【学習環境】の下で行われる諸活動、そしてそれらを通しての【能力の獲得】には、生徒たちの【将来との繋がり】がある。それは＜進路への影響＞という形での近未来への効果に加えて、さらにその後の＜未来との繋がり＞という長期的な影響も見られる。

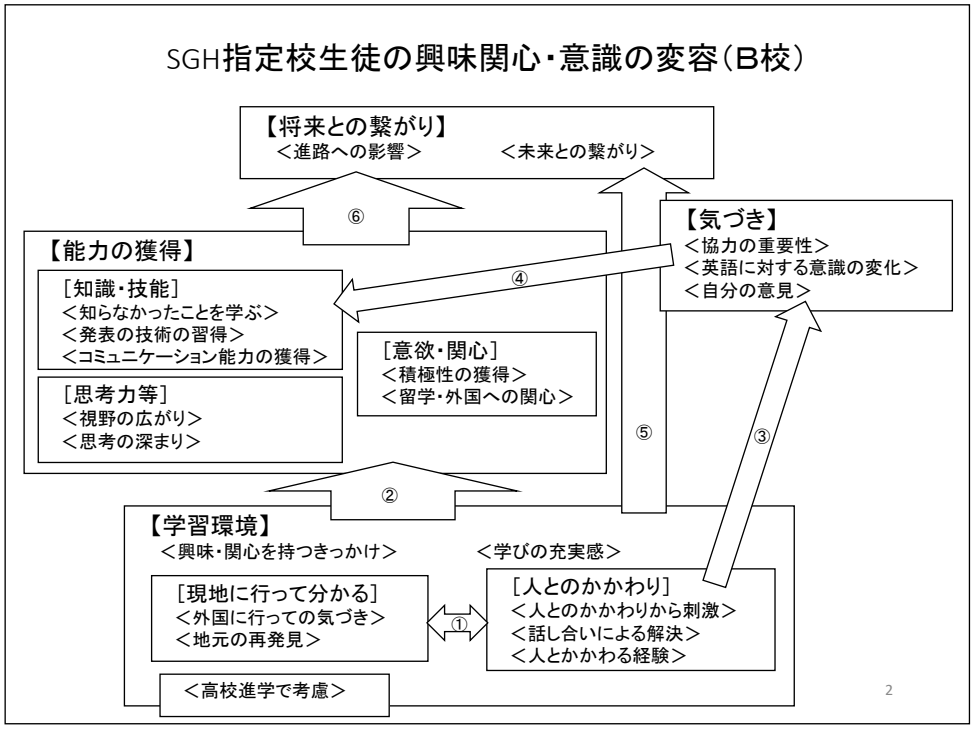

図２．Ｂ校生徒調査分析の概念図

3) 各カテゴリー等の間の関係性

次に、A 校と同様に、概念図にある矢印の意味を説明することにより、各カテゴリー等の関係性を示したい。

矢印①：SGH の教育プログラムで［現地に行って分かること］の多くは、そこでの［人とのかかわり］と関係している。現地の人、現場で活動する人とかかわることで、生徒は新たな気づきや発見をしている。

矢印②：SGH 指定により整備された今までにない【学習環境】で活動や学習をしたことが、［知識･技能］、［意欲･関心］、［思考力等］といった【能力の獲得】につながっていると生徒は認識している。

矢印③：生徒はとりわけ SGH の教育プログラムにおける［人とのかかわり］から刺激を受けている。そのことが学びに必要な様々な事柄についての生徒の【気づき】につながっている。

矢印④：生徒は、学びに関しての様々な【気づき】が、積極的な意見の表明や話し合いといった生徒の学習行動の変化を促し、とりわけ［知識･技能］の獲得に繋がっていると認識している。

矢印⑤⑥：生徒は、SGH 指定により整備された【学習環境】で学んだこと自体が（矢印⑤）、また SGH の教育プログラムの様々な活動を通した【能力の獲得】が（矢印⑥）、大学選びや将来の進路に影響を与えたと認識しており、自分の将来にとって有益だったと考えている。

4）ストーリーライン

以上の分析結果をストーリーラインとして要約すると、以下のようになる。SGH に指定され、海外での学習や地元密着型の学習など、最前線に触れる学習環境が整備される。そのような環境下で学ぶことで、生徒たちは、知識・技能、思考力、意欲・関心などが身についたと認識する。特に知識・技能についてはその傾向が強い。また、人とのかかわりや現地での学習は、生徒たちの様々な気づきにつながる。SGH 指定校という環境下での学びは、直接的に、また様々な能力獲得を通して間接的に、進路や将来展望などにも影響を与えている。

３．考察

以上、SGH 指定校２校について、生徒のインタビュー調査の分析を行ってきた。設置者、生徒の進学先、その他属性が大きく異なる両校ではあるが、分析結果には共通する事項も多かった。第１に、両校の生徒とも、自身の高校および SGH の教育活動について充実した教育条件・学習環境にあると考えている点、第２に、そのような環境下での活動を経験することにより、生徒が様々な事柄に関心を持つに至っている点、第 3 に、生徒が様々な面で自らの成長を実感しており、そこに学力の三要素に対応する内容を見いだすことができる点、第４に、生徒が将来や現在に影響があったことを実感している点である。

SGH の教育プログラムにより、生徒たちはそれがなければ行けなかったかもしれない場所、知ることがなかったかもしれない場所に行くことができるようになった。かくして設けられた学習の場においては、様々な人と触れる機会を多く持つことができた。このような特別な学習環境下で、最前線で活躍する人々や日常的には会うことがない人々と接することにより、基本的に学校内で行われる一般的な高校教育では得ることが難しいような大きな刺激を受けている。

また、このような機会を通して得た知見を深める事後の学習過程においては、知識伝達型とは異なる教育方法――例えば同級生等との話し合いや意見交換、教員等からのアドバイス等――が多く採用される。そのことも生徒たちの気づきや興味関心を喚起していた。おそらく生徒たちは日常的に学力の３要

素というものは意識していないと思われる。しかし、その語りからはそれらを習得していること、またチームでの作業の仕方、意見表明の重要性、プレゼンテーションの技術といった汎用的能力も獲得したと認識していることが分かる。本稿では主たる対象として取り上げなかったが、大学生となった卒業生はこのことをより明確に自覚している。

さらに、程度の差はあるものの、SGH の教育プログラムから刺激を受けたことが、進路選択や将来展望に影響があったと考える生徒も多い。序で述べたように、SGH の公募要領では予め達成目標を設定することが求められている。そのうち相対的に長いスパンを設定している「指定４年目以降に検証する目標」として「a. 国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合」、「b. 海外大学へ進学する生徒の人数」、「c. SGH での課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合」、「d. 大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数」が挙げられている。いずれも数値目標であることへの疑問はここでは触れないでおくが、今回の調査対象生徒の発話には、「b」以外の３つについては複数の言及があった（予定や希望も含む）。ただし、ここで着目しておきたいのは、SGH の教育プログラムの未来に対する影響は、間近にある進学先（大学・学部）の選定にとどまるものではなく、その先の将来に就きたい職業や進みたい領域を考えることにまで及ぶと捉えられていることである。

このように、SGH 指定校の生徒には、一方では、その教育プログラムとして用意された、従前の高校教育には無かったタイプの学習の場面における学びや気づきがある。他方では、このような学びの振り返りや、それを深めたり、発表・報告に向けての準備をしたりする過程における、汎用的能力の獲得等に関する学びや気づきがある。さらに SGH の教育プログラムの経験や学び・気づきが、進路等の生徒の将来に影響を与えている。すなわち、SGH の教育プログラムは、そこで学ぶ生徒に対して、第 1 に特別な教育機会での直接的な学び、第 2 にそれに関連する事後の学習機会における間接的な学び、第３にそれらの将来への影響という波及的効果を提供しているといえる。

結

上に示した生徒の興味関心・意識の変容は、まずもって SGH に指定されて特別な学習環境が提供されたことがきっかけとなっている。これまでのスタイルとは異なる非日常的な教育機会が生徒たちに大いに刺激を与えている。生徒の認識というレベルではあるが、SGH の教育プログラムは、生徒の興味関心を刺激していることに加えて、現行の教育課程で求められている能力の獲得にも寄与し、将来に影響を与えているという点で、少なくとも一定の教育成果を生んでいると捉えられる。実際にどの程度の能力が身についているかは別途測定しなければならないが、何も手応えがなければ学習者本人がそのように認識することはないはずである。また、このような成長の実感は生徒たち自身によるものだけではない。教員も生徒の成長を実感しており、それが教員の動機付けとなっていることが明らかにされている [10]。生徒の成長に対する実感が、教師のモチベーションに作用するという副次的効果も生じている。

本研究から明らかになった重要なポイントの 1 つは刺激的な教育機会・場面の存在、そしてそこにおける他者との接触である。ここから高校教育への示唆として、予算等の関係で SGH の教育プログラムのような海外での研修は望めないにしても、興味関心や意識、好奇心を高めるためには、生徒たちが本物、リアリティのあるものに接する仕掛けをすること、とりわけ他者との対話が可能になるような場面を設定することが重要であると考えられる。既に探究型学習等において様々な工夫はなされていると

思われるが、とりわけ教室外・学校外に存在する教育資源の有効性が示唆される。もちろん、そのような教育方法を取り入れることには時間を要するし、高校の現場では大学進学のための勉強との兼ね合いも懸念されるであろう。しかし、本研究からは SGH の教育プログラムを通して、高校生全体に求められる学力の３要素が身についていると生徒が認識していることから、両立の可能性はあると思われる。

政策評価との関係では、本研究から、大学進学という短期的な未来への影響だけではなく、中長期的なそれへの影響があると当事者である生徒が認識しており、短期的な視野の成果指標では測ることができない成果が存在する可能性を示している点が注目される。そもそも SGH 事業はグローバル人材の育成を目的とするものであり、それが達成できたか否かは、生徒たちが社会に出て一線で活躍するようになってから、すなわち早くて５年、おそらくはそれ以上経ってからでないと判断は難しいはずである。それを待たずして SGH 事業が早々に見切りを付けられた形となった。

より適切な政策を実施するためには、EBPM においてより広範な成果を視野に入れること、例えばここで示したような関係者の動機付けや興味関心の喚起といった要素、さらには長期的成果を的確に捉えて取り込むことが求められる。後継事業の WWL 等において、外面的・短期的な成果だけでなく、内面的・中長期的な成果の把握を追究すること、そのような手法の開発を行うことが期待される。

最後に、本稿の限界・課題と展望を述べておきたい。本稿では SGH 指定校２校の生徒調査の分析を行い、両校に共通してみられる要素を中心に分析を行ったが、相違については十分に言及することができなかった。例えば、生成されたカテゴリーおよびサブカテゴリー自体は比較的似通っているが、発話に見るそれらの関係性については A 校と比べて B 校はバラツキが少ない。このような違いを安易に学校の違いだけで説明してしまうのは適切ではなく、相違の解釈については慎重に行う必要があると考える。また、本稿は紙面の関係から分析を生徒調査に限定したため、並行して実施した教員および卒業生調査との関係は論じられなかった。これらにおいても生徒の成長が実感されるという結果が得られている一方で、相違も見られる。すなわち、生徒は基本的に自らの成長とその要因や影響を中心に見ているのに対して、教員は準備や運営面との関係も含めて、卒業生は大学生になって実感したこととの関係で、成長を捉えているという側面も見られる。これらを総合的に分析することにより、SGH の成果を横方向・縦方向への広がりをもって捉えることができると考える。今後それぞれの分析結果を相互の関係も検討し、さらに総合的・多角的に考察を行っていきたい。これらの点については、稿を改めて検討したい。

註

1）高見茂「教育行政の概念」高見茂・服部憲児編著『教育行政提要（平成版）』（協同出版、2017 年）20-21 頁。

2）森田正信「教育行政における EBPM の取組状況について」『教育行財政研究』第 46 号（2019 年）、25-30 頁、参照。

3）服部憲児「高校教員のスーパーグローバルハイスクールへの対応と教育力・意識の変容に関する質的研究」『地域連携教育研究』第 6 号（2021 年）。同論文では主要な先行研究として、川崎将男・木

野泰伸・朱藝・椿広計・永井裕久・ベントンキャロライン ファーン『高校生のグローバル関心とSGH についての意識調査報告書』(2016 年)、野田正人「研究開発校事業の学校改善への効果の定量的調査―スーパーグローバルハイスクール事業からの検討―」『教育行財政研究』第 44 号（2017 年）が挙げられている。

4）服部憲児・祁白麗「グローバル人材を育てるカリキュラム改革―SGH、WWL の取り組みに着目して―」南部広孝編『検証 日本の教育改革―激動の 2010 年代を振り返る―』（学事出版、2021 年）108～109 頁。

5）木下康仁『ライブ講義 M-GTA』（弘文堂、2007 年）、木下康仁『質的研究の記述の厚み』（弘文堂、2009 年）。

6）服部憲児、前掲書、20～21 頁。

7）ここでの分析手順の説明等は，主として橋場論・小貫有紀子「学習支援活動に携わる学生スタッフの変容プロセスに関する探索的研究」『名古屋高等教育研究』14（2014 年）の書式に則った。

8）M-GTA においては、必ずしも発話数によって概念の成立・不成立が決まるものではないが、各概念の発話数、発話者数を参考として以下に示しておく。

概念別発話数・発話者数（A校）

概念番号	#1	#2	#4	#5	#6	#7	#8	#9	#10	#11	#12	#13	#14	#15	#16	#18	#19	#20	#21	#23	#24	#25	#26
発話数	4	18	25	6	10	5	23	16	11	4	2	7	3	6	12	5	3	11	3	8	5	2	8
発話者数	4	16	13	5	6	5	15	9	8	3	2	5	3	5	10	4	3	8	3	4	5	2	7

概念別発話数・発話者数（B校）

概念番号	#1	#3	#6	#8	#10	#11	#12	#13	#14	#16	#17	#18	#20	#21	#22	#23	#24	#25	#28	#29
発話数	6	8	4	13	12	6	4	5	9	11	10	9	8	4	3	5	6	7	8	12
発話者数	6	8	4	9	7	6	4	4	7	7	7	8	7	4	3	5	5	6	6	11

9）図中に用いられている矢印の方向は、調査対象者の発話に見られるカテゴリー等間の関係性であり、発話者の認識における因果関係を示すものである。矢印の太さは概ね関係する発話数の多さを示しているが、それと実際の因果関係の強さとの関係は慎重に検討する必要がある。また、太めの（関係する発話数の多い）矢印であっても、それが全ての調査対象者の発話に必ず見られるものではない。

10）服部憲児、前掲書、29 頁。

【謝辞】本研究に協力いただいた全ての関係者の皆様に御礼申し上げます。

I would like to thank Editage (www.editage.com) for English language editing.

Response of High School Students to the Super Global High School Project

-Qualitative Research of Changes in their Interests and Consciousness-

Kenji HATTORI

Japan has recently adopted a performance-based approach to its educational policy, and the achievement level of educational programs are evaluated by using quantitative numerical targets. However, educational outcomes are not limited to quantification. This article thus aims to clarify educational outcomes that are difficult to grasp numerically. For this purpose, it used qualitative analysis methods for the Super Global High School (SGH) project from multiple perspectives, considering the process. By conducting an interview survey of 39 students from two SGH-project-designated schools, the author examined how the students perceive the SGH educational program, what they feel and what they learn, and what impact they consequently perceive.

The interview analysis led to the following four findings:

(1) Students consider themselves in a fulfilling learning environment for their high school and SGH educational activities.

(2) By experiencing activities in such a fulfilling environment, students have become interested in various things.

(3) Through the SGH's educational program, students feel their own growth in various aspects and recognize that they have acquired the three elements of academic ability: knowledge and skills, thinking ability, and the ability to expressive themselves.

(4) Furthermore, students realize that their learning experience had an effect to their present and the future.